

引揚者となる人たちと歌の場面

―外地居留時、抑留時、避難時、引揚船内で、そして戦後日本社会で

そのとき歌い、そのとき聴いた〈そのI〉

藤川琢馬（会員）

2016年は、組織的な引揚げが開始された昭和21年から数えて70周年に当たり、満蒙との関係が深い本国際善隣協会が、「引揚70周年記念の集い」を10月20日東京・銀座にて開催したことは、記憶に新しい。私はこの引揚げイベント開催に、実行委員の一人として係わらせていただいた。その機にふと、「引揚者と歌」という観点を着想し、引揚者となる人たちの外地居留時や引揚げ時、また引揚げ後戦後社会において彼らが体験した場面場面で、歌がどう係わったか、歌を通じて彼らの想いに触れることができないだろうかと考えた。しかし敗戦の結果、最も過酷な運命に立たされた満蒙、樺太、北朝鮮などからの引揚者に、引揚げの過程において歌で慰められた、あるいは歌

に興じたような状況があったかどうか、逃避行の途上、避難生活の場、あるいは引揚船内で、せいぜい、心を休めるわずかなひとときでもあったとすれば、唱歌や流行歌など、慣れ親しんでいた歌の断片を口ずさむ程度のことであつたらう。引揚げや引揚者に係わる後年になって作られた歌はあるが、そのときに「歌が生まれた」ということは考えられない。それに対して、たとえばシベリア抑留者などの場合は、その過酷な抑留生活のなかにあつても、集団が生き延びるうえで歌が一定の役割を果たしたことは、証言され記録されている。彼らの場合には、歌が生まれ、歌われ、伝播される日常と集団とがあつた。最もよく知られている例は「異国の丘」であり、収監者の場合

は「あゝモンテンルパの夜は更けて」である。これら抑留・収監時に生まれた歌は、まさにそのときその現場で、その当事者たちによって歌われた、彼らの想いを表現する貴重な証言であり、歌によって人々の共通の記憶が残されている。

一方、引揚者の帰還を待ち受ける国内（内地）では、「かえり船」や「岸壁の母」が歌われた。「かえり船」の歌詞の内容は復員や引揚げを特定していないが、故国への帰還に涙する男子が歌われている。復員者・引揚者は内地でこの歌を聴いて涙したのであろう。レコードが発売された昭和21年11月の、その年末までに、500万人を超える復員・引揚者の帰還があつた。

本稿では民間引揚者だけでなく、一部民間人を含めた将兵たちの抑留帰還者や

収監されていた人々とも合わせて対象とした（復員と引揚げの表記に関し、1948年、邦人の帰還に関する業務が、厚生省外局引揚援護局に統一されて以来、将兵の帰還者・民間人帰国者とも、引揚者と総称されるようになった。本稿ではその経緯からして使い分けをすることが多いが、必ずしも厳密ではない）。

引揚者や抑留帰還者が祖国の地を踏んだとき、彼らの多くにとって、「焼け跡に流れる」「リンゴの唄」が、まず耳に入ってきたであろう。終戦後2か月も経たない昭和20年10月10日、映画「そよかぜ」が封切られ、21年1月、挿入歌「リンゴの唄」のレコードが発売された。このすばやい取り組みは、庶民が如何に娯楽に飢えていたかという状況のなかで、束縛から解放された製作者たちと庶民の、エネルギーのほとばしりを感じる。しかしある席で、この歌に対する、内地の人々がまず感じたであろう戦後の明るさと解放感とは違って、違和感、さらには怒りを覚えたという満洲引揚者の言に私は接し、驚いた。引揚者たちの、終戦後引揚げに至るまでの体験は、内地においても多くの人が空襲に遭い、家族と死別し、死と隣り合わせの苦難を経たという体験と、苦難においては同様であっても、それぞれに異質な面

があり、両者が遭遇する時間的・空間的な差異と異質の体験は、同一の歌に対しての受け止め方を全く違ったものにしたということを知ったのは、ショックであった。しかも、このような感情をいだいた引揚者は一人だけではないことを知った。彼らの、引揚げ時や引揚げ後の辛苦に想いを致さず、私は世間的常識をそのまま口にしたのだった。本稿の主題を着想したのは、このときのショックが心底に潜んでいたからだだったと、あとになって気づいた。

昭和21年までに510万人、22年までにさらに74万人、23年までに30万人、累計614万人（厚生省援護局）が引揚げてきた。国内（内地）の誰もが生きることに必死であった戦後2、3年の間に、何百万人も引揚者・帰還者が割り込んできたのであるから、彼らは歓迎されざる立場にあった（さらに自然増、すなわちベビーブームが人口増に輪をかけた）。身一つで、持ち帰った財産は何もなく、住む家もなく、厄介ものであった彼らや子どもたちのなかには、貧困、居住地域や言葉づかいの違いなどによる、社会からの差別があったことが記録されている。しかし引揚者たちは、生き抜くうえで内地の社会に同化していかなければならなかった。一方で、引揚者たちは同郷と同

窓の組織を作って精神的拠りどころとし、相互扶助を行った。彼らのなかには共通の境遇と文化があり、そこにおいて、歌は大きな役割を果たした。むしろ歌を通じて、共通のアイデンティティを確認し合ってきたといえよう。さらには、引揚者が戦後文化に影響を及ぼしたことも、研究されている。

関係する歌について記述する前に、やはり順序として「引揚げ」について、それに至る全貌をとらえておきたい（表参照）。その全貌は、わが国のたどった近代化プロセスのなかにある。引揚げの事態に至るその具体的出発は、樺太・千島交換条約による領土確定後の、日清・日露戦争などを契機とする領土・権益の獲得からであり、諸々の植民地経営や外地体験を経て終戦に至るまでのプロセスは、わが国の進路の選択である。したがって、引揚げを引揚者だけのテーマにとどめておくわけにはいかない。

引揚げを余儀なくされるこの過程の、種々多様な事件・事象はすべて引揚げに向けて収斂する。敗戦Ⅱ引揚げという事象は人をして国をして、それまで積み重ねてきたはずすべてのことを断絶させ、人にはただ良きにつけ悪しきにつけ思い出として、国には歴史としてのみつながつている。

表 引揚げに係わるプロセスと事象

領土・権益獲得 →	植民地経営・外地生活 →	敗戦・引揚げ →	引揚者の戦後
樺太・千島交換条約 (1875)	行政近代化・傀儡統治	米ソ・国共情勢	国内受入れ態勢
日清戦争→台湾獲得 (1895)	植民・移民政策	現地定着方針	再植民
日露戦争→樺太獲得 (1905)	(満蒙開拓団・青少年	逃避行・難民化	引揚者文化
関東州租借	義勇軍・大陸花嫁)	ソ連軍侵攻・惨劇	引揚者組織
鉄道権益獲得	治安・衛生・インフラ	避難生活	補償問題
日韓併合 (1910)	殖産・産業移植	抑留・留用	残留孤児・婦人
委任統治→南洋諸島 (1922)	教育・人材育成	家族離別	遺骨収拾
満洲建国 (1932)	文化・啓蒙活動	送り出し	慰霊訪問
日中戦争 (1937)	異文化接触	内地との情報断絶	引揚文学
太平洋戦争 (1941)	大東亜思想	民族・人口大移動	戦後復興
	一等国民・閉鎖社会		
	植民地人内地流入	参考：ドイツの場合	

(藤川琢馬『引揚者と歌の場面』(2018))

外地から帰還した人々は一括して「引揚者」として束ねられる。そして引揚げ後戦後社会のなかに拡散し、時代の推移とともに薄まり消失したかに見える。およそ

120年前の出発はすでに歴史となり、引揚げもすでに歴史に入りつつあるが、残留孤児や残留婦人などの問題は消え去ったわけではないし、慰霊訪問、遺骨収拾には終わりが無い。引揚者が持つ、引揚げという共通の記憶は、引揚者のみならず、現在に至るわが国の体験として記憶にとどめておかねばならない。

私が対象とする歌はこの表のそれぞれのステップと領域に係わるものである。すなわち、引揚者となる人たちの、外地生活時、敗戦による逃避行や避難生活時、あるいは抑留・収監時、さらには引揚げ船内で、そして戦後日本社会のなかで、歌い、聴き、出会った数々の歌である。また本稿が対象とする人たちは、復員も含めて主には「引揚者となる人たち」であるが、材料は少ないものの大陸に残留したり終戦前に帰国した人たちなど、外地生活の体験者も対象に加えたい。

私は、これらの歌を収集しようとしたとき、引揚者である知人に当たる以外、引揚者に広く聴き取りを行える立場にはない。そこで、多くは自伝、手記、歌謡史などの書籍やWeb情報、市販CDなどにおける記述から「証拠」材料を収集した。歌詞しかわからず曲譜や音源が揃えられない歌も多くあった。私が所蔵す

る資料の多くは、満洲国官吏であった父から引き継いだものである。引用は満洲関係が多く、バランスを欠くものとなっていることは否めない。

私は150曲を越したこれらの歌を集め、『引揚者と歌の場面』と題し編著を施した。以下は本著の一部を手直したものである。これらの歌のなかには「懐メロ」として親しまれているものも多くある。それ以外にも、お目通しいただくことによって、懐かしく思い出される歌もあるであろう。

1. 北の果てにあつて想うは故国

昭和21年9月から10月にかけて、なかにし礼(本名中西禮三)氏一家は、避難地哈爾濱から貨物車、無蓋車を乗り継いで、15日かかって葫蘆島に着く。その間礼氏は、同じ貨車に乗っていたある中年の男が月明りの下に吹く、ハーモニカの音に耳を傾けた。「青春日記」「高原の旅愁」「マロニエの木蔭」「旅の夜風」「上海の街角で」「人生の並木路」。泣くな妹よ 妹よ泣くな……。温和しく聞いていた人たちは低い声で唄い出した。一人、二人、三人……。やがて、低く、うめくような声の大合唱となったが、それは、そのまま長く連なった、汽車全体の

すすり泣きに変わっていった。私も一緒になって歌った」。

中西家は満洲・牡丹江で酒造を中心に手広く事業を行っていた。それが、昭和20年8月11日、突然ソ連軍数十機が牡丹江を爆撃し、庭で遊んでいた7歳の禮三坊やは、爆風で吹き飛ばされた。その日の夜、一家は軍用列車で牡丹江を脱出し、戦闘機から機銃掃射を受けた地獄絵図の逃避行の末、丸三日半かかって終戦の日の朝、哈爾濱に着いた。禮三は9月の誕生日で8歳を迎え、13か月の避難生活が始まった。

礼氏は自伝において、一家が牡丹江に居住していたとき、家に客がよく集まり宴会となつて、満洲に生きる人たちが望郷の想いを込めて歌つたと記し、「緑の地平線」「無情の夢」「小さな喫茶店」「野崎小唄」「大江戸出世小唄」「むらさき小唄」、そして「国境の町」を挙げた。♪^{（そら）} 櫓の鈴さえ淋しくひびく 雪の曠野よ 町の灯よ」。「この歌を唄うと必ず泣き出す大人たちの心の中はわからなかったが、歌の持つ力の不思議さはこの頃から感じていた」と述べる（『翔べ！わが想いよ』）。

外地に住む人たちが日ごろ何の歌を歌っていたかということになると、具体的にその記録を見出すのはそれほど容易では

ないし、それ以上に、彼らがとくに何の歌を歌って感傷に浸ったかを、具体的に示す資料は見出しにくい。音楽に早熟であったに違いない著者であるからこそ、8歳の子どもであっても、礼氏をよく記憶し、記述してくれた。

大陸もの、国境もの、曠野もの、あるいは幌馬車ものと呼ばれる最初の流行歌は「さすらいの唄」（大正6年、♪行こか戻るか オーロラの下を〜）といわれる。「国境の町」はそれと同じ曲調を感じさせる。7年間満鉄に勤務した東海林太郎に、満洲の歌は相応しい。東海林太郎のやや生硬な歌唱は、凍てついた殺伐さをいっそう感じさせ、そうであればあるほど、柔和で優しい日本に対する望郷の思いは募ってくる。満洲が建国されて2年、多くの日本人が辺境の地へと移り住んだ。戦後、満洲引揚者たちの愛唱歌No.1でもあろう。

2. シベリア抑留スタートとなった 悲哀の歌

突然のソ連軍による空襲を受けたなかにし礼氏一家が昭和20年8月11日牡丹江を脱出し、哈爾濱のホテルに避難したことは前述した。その地でもソ連兵による略奪・銃撃に遭い、「その際死ななかつ

た日本の男たちは、軍人も民間人も、腰を縄でつながれ、頭に両手を乗せて、外に待つシベリア強制収容所行きのバスに、豚や羊のように押し込まれる。それでも彼らは歌をうたっていた。日本男児と生まれ来て……。大声で泣いているような歌だった」（『同上』）と記された「戦陣訓の歌」は、昭和16年1月陸軍大臣東条英機が示達した訓令（陸訓一号）の副産物であった。レコード各社から同名異曲のレコードが出されたが、梅木三郎作詞の歌が広く普及した。戦争が膠着状態となつて長期化し、軍隊の士気が緩んできたので、軍人としてとるべき行動規範を示したものであった。

このなかの「生きて虜囚の辱^{はづかしめ}を受けず」の一節は、軍人の玉碎・民間人の自決を勧めるもので、罪は重い。しかし、レコードが出され一般の人々にも普及したからには、歌が必ずしもお仕着せだけだったとはいえない。虜囚となつてしまった彼らは、歌を叫ぶこと以外、現実に対処するすべがなかったであろう。

「戦陣訓の歌」については、澤地久枝さんの記述もある（『14歳（フォーティーン）』）。昭和20年7月10日、吉林高等女学校3年生の澤地さんは、長野県出身者なる水曲流開拓団での、1か月の泊り

込み動員を終える。この7月5日には、関東軍は図們、新京、大連を結ぶ三角地帯を絶対国防圏とし、あと三分の二の満洲は放棄した。8月9日のソ連軍参戦からほどなく、通化方面に増強されるはずの軍隊が貨車で南下し、吉林で降ろされた。19日ソ連軍が入場し、関東軍は武装解除を命じられる。ソ連兵にマンドリン銃を突き付けられ、隊伍を組んだ日本兵は「戦陣訓の歌」を歌って、著者たちの視界から去っていく。シベリア抑留である。かたや哈爾濱、かたや吉林で、「戦陣訓の歌」は、シベリア抑留スタート時の歌となった。心を奮い立たせる歌よりは、絶望感に打ちひしがれた情景を描写する歌になってしまった。

3. シベリア抑留の苦難のなかで

シベリアからの復員軍人中村耕造は、昭和23年8月1日のNHK素人のど自慢で「異国の丘」を歌い、合格の鐘を鳴らした。「これはどういう歌ですか」と質問するアナウンサーに、「シベリアに抑留されている日本人が苦難の日々を耐えて、生き抜くために作った歌です」と答えた。それをラジオで聴いていた作詞家佐伯孝夫はNHKに駆けつけ、中村耕造と契約し、翌9月には、竹山逸郎との共

演でレコード化された。中村は翌年、近江俊郎と「ハバロフスク小唄」も出した。作曲者吉田正（1921-98）は、「異国の丘」の原曲「昨日も今日も」について述べる（自伝『生命ある限り』）。

それによると、昭和18年の夏、秋ごろ、所属する連隊の満洲・大興安嶺での演習の折、突然の盲腸・腹膜炎で入院、そのときふと浮かんだメロディーに自分なりの歌詞をつけて作ったものであった。入院中に所属の部隊が南方ペリリュー島へ転進、玉碎したのに対し、吉田は免れた。この「昨日も今日も」のメロディーに、同じくシベリア抑留兵の増田幸治が、「俘虜の歌へる」という詩を作って当てはめた。これが、「異国の丘」という題名でシベリア各地の捕虜の間に広まっていたことを、吉田は帰還後に知った。収容所から4、5キロある作業所までの道のりの苦しみを紛らわす自班の労働歌で、抑留兵たちの心の叫びだった。

中村耕造は、「異国の丘」の歌詞の一節一節に表現された苦難について語っている（『占領期 生活世相誌資料Ⅲ』）。

「シベリアの寒さに、生きていく気持さえ失いかけ、満たされない腹を抱えてどぶ鼠のように、炊事場の裏に棄てられた野菜くずや腐ったもの、松の皮から犬猫

蛙や蛇の類まで、血眼になってあさり尽くし、次第に暮れかかる異国の丘に、誰ひとり口を利くものはなく、聞こえるものはかちん、かーんと伐採する斧の音ばかり。いつになったら還れるのだろうか、どこからともなくデマのような本当のようない話が、あぶくのように出ては消え、消えては出てゆくけれども、一つとして本当の話はなかった。辛いから苦しいからと、なき面ばかりしているわけにはいかず、ときおり落語・歌謡曲などの演芸会を催しては、忘れ果てた笑顔をお互いにさぐり合う。お国自慢の歌を唄い踊っているうちに、またしても想い出されるのは故郷のこと、ひょうきんな踊り手の目頭にきらりと光るものをみつけると、一座の胸にじーんと忍び込む郷愁……。『異国の丘』は全国の留守家族の紅涙を絞った。と同時に、後述のようにこれほど「替歌」を生んだ歌もない。単なるヒット曲ではなく、ヒット曲であるがゆえに、庶民がはけ口を求める格好の対象で、歌はまさに当時の世相を表すものであった。

4. 引揚船内で上陸港で、引揚者を慰めたいと

引揚船といえど興安丸がまず頭に浮か

ぶが、輸送船がないなかで、ある駆逐艦が引揚げの任に当たった記録がある。太平洋戦争の開戦以来数々の海戦を潜り抜け生還してきた駆逐艦「雪風」の航海長中垣義幸氏による記述である（半藤一利編『太平洋戦争 日本軍艦戦記』）。

「雪風」は昭和15年竣工であったため、艦体は最高の材質をもって造られていたが兵装や航海計器が旧式であった。終戦後の9月15日、「特別輸送艦」に指定され、外地にある軍人・民間人の引揚げ業務に当たった。同艦は、昭和21年2月から12月まで3万8700海里を航海し、1万3000人の人員を輸送した。葫蘆島からの満洲引揚げ輸送では、着のみのままの疲れ切った引揚者に接し、ただ悲惨で屈辱的であったと振り返る。

回を重ねた葫蘆島行きで状況がわかってきた乗組員たちは、引揚者を慰め、元気づけるために工夫を凝らしたが、みなで合唱した「復員者歓迎の歌」は、聞く者も歌う者も懐かしく当時を思いださせるだろうという。

復員者歓迎 雪風の歌

1 皆さん永永 ご苦労さん
 迎えに来ました 雪風が
 故国の便り 満載し
 万里波濤の 浪蹴って

3 春が来ました お国には

今頃桜の 季節でしょう
 家じゃ父さま 母さまが

6 きっと待ってる 指折って

いばらの道は 遠けれど
 つねに雄々しい 希望もて

君等の鍛えし 心身を

捧げよ祖国の 再建に

（作詞 主計長高橋榮）

引揚者を迎える歌ではほぼ必ず、帰国したら祖国の復興に力を合わせようと呼びかけ、敗戦で憔悴しきった人たちを元気づけている。同書によると「雪風」は、昭和21年12月30日「特別保管艦」134隻のなかの1隻として指定され、連合国側へ賠償として引き渡された。さらに昭和22年7月、米・英・ソ・中国の4か国でくじ引きの末、中国（台湾）の所有となった。昭和41年、日露戦争の戦艦「三笠」とともに、帝国海軍の現存する最後の1隻となった「雪風」を永久に保存したいという返還運動が起こり、運動は大きく膨れ上がったが、昭和44年夏、台風により艦底破損して沈没、高雄市でスクラップとなった。しかし、「雪風」の錨と舵輪が中華民国から「雪風保存会」に返還され、そして海上自衛隊に寄贈された。葫蘆島引揚者全体100万人強のなかで

はごく一部ではあるが、「雪風」引揚者はこの歌によって慰められたであろう。

昭和21年10月、当時国民学校5年の三木卓氏（1935）はその自伝小説で、引揚船における演芸会について記述する（『裸足と貝殻』）。

「葫蘆島から博多に入港して、一週間経っても投錨したままで上陸させられず、その間、船員たちの音頭取りで歌謡大会が催されることになった。船員によるにわか楽団が演奏したのは『鈴懸の径』であった。次いで、日本で流行っている歌として『どうじゃね 元氣かね』と怒鳴ったというが、これが歌い出しだという。最後に『ズンドコ節』で、聴衆も一緒になって、リフレインを唱和した」。

主人公豊三少年は「鈴懸の径」は好きな歌だったが、「どうじゃね 元氣かね」が流行っているようでは日本にもあまり期待はできそうにない、と思う。マドロス楽団が引っ込み、はじめはためらっていた聴衆が一人、また一人と出てきて、芸を披露した。「緑の地平線」「並木の雨」「一人は若い」「男の純情」「旅姿三人男」広沢虎造「石松三十石船」。歌謡大会は毎晩の行事になった。

「どうじゃね 元氣かね」（楠木繁夫歌、♪どうじゃね 元氣かね しっかりしっか

りやりなされ」は、東条英機の口ぐせだった。太平洋戦争緒戦の優位は、早くも昭和17年6月、ミッドウェー海戦で挫折、以降、太平洋での制海権・制空権を失い、劣勢に転じてゆく。国民がただしく状況を知らされていないときに作られた、本当は苦しい紛れの冗談音楽でしかなかったこの歌も、敗戦後の引揚船のなかでは役に立っただろうか。

「昭和21年10月18日の昼前、いよいよ上陸。豊三少年の一家は、30メートルほどの高さのある舷側から、船腹に沿って斜めに取り付けられている鋼鉄のタラップを降りてゆく。小児まひで左脚が自由な豊三は、船員におぶらされて下船する。そして、粗末な木造平屋建ての宿舎（収容所）に入ると、大きな筆の字で、「引揚者のみなさま、お歸りなさい。長い間ご苦労さまでした。上陸最初の一夜をここでゆつくりお過ごし下さい」と書かれた模造紙が貼られていた。さらに行くと、また大判の模造紙に歌の歌詞が書かれていた。「故郷の廃家」の一番であった」。

故郷の廃家

幾年ふるさと 来てみれば
咲く花鳴く鳥 そよぐ風
角辺の小川の ささやきも

なれにし昔に 変らねど
あれたる 我が家に
住む人 絶えてなく

（作詞 犬童球溪）

「豊三はその歌詞をいくども繰り返し読み、感動が体のすみずみにまでひろがっていくのを覚えた。……中国の広野をさまよう旅をしていたあいだ、一度も出会わなかったやさしさだった」。

5. パラオ引揚者が持ち帰った歌

パラオ引揚者からの聴き取りを行った研究（島村恭則編『引揚者の戦後』）において、李建志氏（関西学院大学社会学部）ならびに齋藤由紀氏（大阪国際大学国際教養学部）は、日本が終戦となったとき、現地日本人が強制的に覚えさせられたという歌を記述している。以下同書による。

この歌は、昭和21年2月8日アメリカのLST（揚陸艦）で浦賀（横須賀市）に引揚げた久保松雄さん（昭和10年パラオ生まれ）が紹介した。当時日本政府は、国内の食糧難を解決するため、元軍用地などを開拓させる「緊急開拓実施要項」（昭和20年11月）を定めていて、久保さんらはその要項に則って、のちに宮崎県小林市環野地区に入植した。この歌は環野の人なら誰でも知っているが、日本に

還る船に乗ってからは「歌えなくなり」、それ以降歌わなくなったと久保さんは述べる。著者はまた、沖縄・那覇で聴き取り調査を行ったとき、パラオからの沖縄引揚者Aさんが歌ってくれた歌と同じだったと述べる。歌詞は、屈辱の8月15日を忘れるなどいい、2番では、これを糧に国家再建を果たしていこうと呼びかけている。敗戦国民がなぜこのような歌を歌ったかという点、パラオでは終戦時の治安維持のため、旧日本軍が米軍により邦人の管理を任せられ、軍人が現地召集の教員に歌を作らせたと推測され、現地住民が指導されたことによる。

私は著者に、この歌のメロディーを知りたいとお便りしたところ、幸いなことに便宜を与えていただいた。2016年8月30日、宮城県蔵王町の入植地を訪問する機会を得、同行してくださった。当地は小林市環野とは別の開拓地で、南洋のパラオに対して北の「北原尾」と名付けられ、現地名は遠刈田温泉字北原尾である。この歌は北原尾への入植者にも伝わっていたので、パラオでは広く歌われた歌だとわかる。

あゝ、八月十五日

1 大和民族絶やそうと
仇がついに落とした原子弾



「引揚者と歌の場面」を紹介した朝日新聞神奈川版記事（2018年3月24日）

友よ伝えよ子々孫々に
屈辱の日の血の涙

2
お忘れなるか八一五
戦は既に終わったけれど
武器なき戦はこれからだ
共に生きようわれらの世界
国家再建なる日まで
お忘れなるか八一五

（2002年3月27日『宮崎日日新聞』掲載）
パラオ引揚者に関連して、朝日新聞記事の1枚の写真について記しておきたい。

それは2018年3月24日付朝日新聞神奈川版「神奈川の記憶104」で、私の研究『引揚者と歌』を紹介したものである。記事にある写真には次の説明が付さ

れている。「1946年2月、全国巡幸の皮切りに神奈川県を訪れた昭和天皇は、横須賀で引き揚げ者の施設を視察した。造船所の宿舎を転用し1800人が収容されていた」。

私は、この写真はパラオ引揚者らの収容所光景ではないかと直感した。そうであれば、私の執筆内容の一点を例証する写真である。私は、写真の裏に含まれる事実を確認した。

前記『引揚者の戦後』によると、南洋群島の一般住民の引揚げ第一陣は600名で、昭和21年1月25日米軍のLSTにより浦賀に上陸した。浦賀上陸後の彼らは40数日間収容されたのち、各地の開拓地に入植するか、あるいは親類・縁故を頼って全国に散っていった。北原尾地区（宮城県蔵王町）への入植者は昭和21年3月29日第一陣男子38名が現地に到着した。第一陣の出発が環野地区（宮崎県小林市）とほとんど同じ時期だった。

著者李氏が記述した文中のNさん（1941年パラオ生まれ）はのちに北原尾に入植したが、浦賀に天皇が訪問されたときのことを記憶していて、これは環野の人たちの記憶とも一致する。Nさんは父親に頭を押さえられ、頭を下げるように言われたが、「戦争に負けて、謝るの

は天皇なのに、なんで頭を下げさせられるんだろう」と思ったという。

同書には天皇の巡幸が具体的に記されている。「浦賀の収容所はある朝、屋外に整列させられた。当時6歳の館下剛さんは、首の回りに真綿を巻いて一番前で寒さに震えていた。雪が降ったと記憶している。『よく帰ってきたね』、眼鏡を掛けた小柄な男性が館下さんの頭をなでた。施設を回っては引き揚げ者を激励していた昭和天皇だった」。館下さんは、「神と教えられた人が目の前にいて大人はひどく緊張していた。両親はずっと『あのときは涙が出たね』と話していたものだ」と振り返る。

前記のNさんは、齋藤氏による記述のなかの引揚者二世・長尾英男さんで、父長尾嘉男さんは昭和8年4月8日南方発展を志し、家族とともにパラオ島の朝日村に入植した方である。英男さんは、「自分はまだ幼かったので天皇のことはわからなかったから、父親から頭を下げろとこつんとたたかれた」と私に話してくれた。この1枚の写真は戦後の象徴天皇とともに、パラオ引揚者の存在を目に見える形で歴史のなかに登場させた。

（つづく）